性の発達に関する心理学研究において
ジェンダーアイデンティティはどのように概念化されてきたか

霜山祥子（東京大学大学院教育学研究科）

The Conceptualization of Gender Identity
in Psychological Gender Development Research
Literature Review on Research Trends and Future Directions

Shoko Shimoyama

Author's Note

Shoko Shimoyama is a PhD student at the Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

In this paper, the conceptualization of gender identity in the psychological research on gender development is reviewed. As a result, in many studies, gender identity is conceptualized as developing in a manner that corresponds directly with biological sex, such that boys develop male identities and girls develop female identities. However, in recent years, this conventional model has been under criticisms and reconsideration. Critiques are such that using this model, the complexity and fluidity of gender identity cannot be captured (e.g. Deaux and Stewart, 2004); as in conventional model, gender identity is viewed as self-awareness of biological sex, a developmental process has been assumed in which gender identity emerges early and reaches its endpoint in childhood (Kohlberg, 1966), accordingly, examinations of the development of gender identity have been biased toward early childhood and childhood, and have not taken into account adolescence and middle age (Cleman et al., 2011); the conventional model cannot capture transgender people's experiences and development of gender identity. These trends are summarized and future directions for researchers are presented at the end of paper.

Keywords: Gender Identity, Gender Development
キーワード：ジェンダーアイデンティティ，性の発達

性の発達に関する心理学研究において
ジェンダーアイデンティティはどのように概念化されてきたか

1　本研究の目的と概要

本研究では，心理学分野における性の発達に関する先行研究において，ジェンダーアイデンティティがどのように概念化されてきたか整理し，今後，ジェンダーアイデンティティに関する心理学的研究を行う上での課題の提示を目的とした。

心理学は乳幼児期・児童期の心理行動レベルの性差の発達について広範な知見を蓄積してきた。特に，乳幼児期・児童期における性的社会化（Sex Typing or Gender Typing）のプロセスや，ジェンダーに関連する認知の発達傾向やジェンダー認知の構造とダイナミクスについて広範に探究されており，現在も日々知見が提出されている（Leaper, 2015）。

特に初期の性の発達研究では，ジェンダーアイデンティティは二元的な生物学的性別に対応すると考えられてきた（Bussy, 2011; Bussy, 2011）。すなわち，男の子は男性のジェンダーアイデンティティを，女の子は女性のジェンダーアイデンティティを発達させることが前提とされてきた。しかし現在では，生物学的決定論や，性別二元論を根拠とするジェンダーアイデンティティ概念の妥当性は再考されている（総説として Holmes, 2019）。結果として心理学分野においてもジェンダーアイデンティティに対するアプローチに発展が見られる。本研究ではこのような動向についてまとめ，今後ジェンダーアイデンティティに関する研究を行う上ではどのようなことに留意する必要があるか検討した。

2　用語の定義と研究者の立場

論を始める前に，用語の定義と研究者の立場を示す。性の発達研究の大半は欧米圏で発展しており，セックス（Sex）とジェンダー（Gender）の定義を確認しておく必要がある。心理学では，セックスとジェンダーという用語は互換的に使用され続けており，統一的な用法は定まっていない（Diamond ea al., 2011）。

Blakemore et al.（2009）は，心理学者が採用してきた定義を 2 つ示している。一つは「セックスは，男性・女性であることの生物学的側面（e.g. ホルモン，染色体，外内性器）を指し，ジェンダーは，男性・女性であることの社会文化的側面を指す（e.g. Unger, 1979）」という定義である。しかし，性別は生物学的かつ社会文化的なものであり，どちらかだけの要因で成り立つものではなく，このように明確に区分けできないという批判もある（e.g. Hines, 2015）。もう一つは，Deaux & Kite（1993）による「セックスは，人工統計上の男性・女性というカテゴリーを指し，ジェンダーは，セックス（sexes）に関する判断（e.g. ステレオタイプ，役割，男性性と女性性）を指す」という定義である。

ここで研究者は，性の発達には生物・心理・社会的要因が関与しているという視点に立脚し，Deaux & Kite（1993）の用法に従って，カテゴリーとしての男性・女性に言及する場合にはセックスを使用し，それ以外はより包括的な概念であるジェンダーという用語を使用する。ただし，このような用法を厳格に守るというよりも，文脈に応じて適切な用法をその都度検討していきたい。また，レビューを行う上では，各

研究者の立場に留意し，文脈に応じてどのような意味合いでセックス・ジェンダーが使用されているか理解することに努めた。

3　性の発達研究の全体像：生まれか育ちか

性の発達を対象とする研究では「生まれか育ちか」が繰り返し問われてきた。性染色体レベルでは男女が明確に区別されるが，心理行動レベルでの性差の発達については，生物学的（遺伝的）要因の影響を重視するべきか，環境要因の影響を重視するべきかが議論され，研究の歴史の各時期でどちらかの視点が優勢となってきた（De Vries et al., 2014）。しかし，「生まれか，育ちか」という議論が，性の発達の全容を理解する上で障壁であると危惧されている。例えば脳神経科学者の Hines（2015）は，ゲノム，初期のホルモン環境や思春期・思春期以降のホルモンといった遺伝的要因，親や仲間といった他者による出生後の社会化といった社会文化的要因，また自己社会化といった認知的要因は，全て発達システムの構成要素として捉えられるべきであり，これらの構成要素が全体としてどのように連携して機能するのか探求する必要があるとしている。発達心理学者の遠藤（2012）は，近年の傾向として，性の発達に影響する遺伝学的基盤や生物学的発生機序を解明しようと試みる生物学的アプローチが飛躍的に発展しており，その中で社会的要因への着目が相対的に薄らいでいると指摘する。しかし，性自認といった人の性に関わる心理行動的特質は多様であり，そこには遺伝的基盤や生物学的発生機序のみならず，心理社会的な環境要因も複雑に絡み合っていると見なすのが妥当として，心理社会的要因は，それ単独ではなく，遺伝的基盤や発生的機序の介在を踏まえてこそ正当な位置付けがなされるため，そこを研究するのが今後の課題であると示唆している（p. 30）。このように，近年では，生まれか育ちかという分断を超えて，生物学的要因，心理社会的要因を統合して性の発達にアプローチしようという努力が自然科学分野，社会科学分野の双方に見られる。

4　性の発達に関する心理学的研究

4.1　性の発達の多次元的側面に関する研究

心理学分野において，心理行動レベルでの性差の発達は多次元的に検討され，広範な研究の蓄積がある。Huston（1985）により原案が作成され，Ruble at el.（2006）が発展させた A Matrix of Gender-Typing（一覧表）では，心理行動レベルでの性差の発達に関わる 24 の側面が整理されている。A Matrix of Gender-Typing では，先行研究から抽出された 6 領域（1. 生物学的・カテゴリー的性別，2. 活動・興味，3. 個人-社会的属性，4. 社会的関係性，5. スタイルと表象，6. ジェンダーに関する価値観）が列として設定されている。そして，行には個人内次元（A. 概念・信念，B. アイデンティティ・自己知覚，C. 嗜好性，D. 行動）が置かれている（詳細は Ruble et al., 2006）。

本研究で焦点を当てるジェンダーアイデンティティは性の発達に関連する一側面であり，【1. 生物学的・カテゴリー的性別】に関連する個人の【B. アイデンティティ・自己知覚】と捉えられて，典型的な発達傾向や，臨床集団における非典型的なジェンダーアイデンティティのヴァリエーションが研究されてきた。

4.2　性の発達理論―理論統合に向けて―

上述したように性の発達に関する広範な知見が蓄積されているが，性の発達の各側面がどの

ような関係性を持って発達していくのかという，全体的な発達機序については十分理解されていない（Ruble et al., 2006）。

一方，発達機序を理解しようという試み自体は多い。心理学を含む社会科学分野における主要なアプローチには，直接的・間接的環境要因の影響に焦点を当てる社会化アプローチ，認知の役割に焦点を当てる認知的アプローチがある。社会化アプローチでは，環境要因の影響を重視し，養育者や家族メンバー，ピア，教師や大人といった子どもへの周囲からの働きかけや，またメディアがジェンダー発達に与える影響，文化・社会的文脈の影響が検討されてきた（e.g. 青野ら編，2008）。認知的アプローチは子どものジェンダーに関する認知に焦点を当て，ジェンダーに関連する認知の発達傾向や，ジェンダー認知の構造・ダイナミクスを検討してきた（e.g. Halim & Ruble, 2011）。

近年では，社会化アプローチと認知的アプローチが交差する傾向にあり，ジェンダー発達理論の統合が進んでいる。心理学分野におけるジェンダー発達理論をレビューした主要な文献には，Maccoby（1966）による The Development of Sex Differences と Maccoby & Jacklin（1974）の Psychology of Sex Differences，また，Handbook of Child Psychology のジェンダー発達に関する 4 章（Huston, 1983; Ruble & Martin, 1998; Ruble et al., 2006; Leaper, 2015）があり，これらの文献を概観すると，20 世紀前半には精神分析理論，社会的学習理論，認知発達理論が主要なアプローチとなっていたが，その後の数十年で代替理論が発展し，近年は理論の統合が進みつつあると示されている。特に Handbook of Child Psychology 7th Edition では，Leaper（2015）により Maccoby and Jacklin（1974）以降発展してきた理論が整理され，近年の展開として統合的理論が紹介されている（表 1，下線部分は統合的理論）。Leaper（2015）は，既存の性の発達理論には内容が重なっているものや，補完し合うものが多いとして理論的統合が喫緊の課題であると指摘している。

表 1　Leaper（2015）から筆者が訳出・作成。

認知発達と情報処理の理論
認知発達理論（Kohlberg, 1966），ジェンダースキーマ理論（Martin & Halverson, 1981），社会認知理論（Bussey & Bandura, 1999），認知のデュアルプロセスモデル（e.g. Amodio & Ratner, 2011），統一社会認知理論（e. g. Greenwald et al., 2002），<u>ジェンダー自己社会化モデル（Tobin et al., 2010）</u>
グループ間理論
社会的アイデンティティ理論（e.g. Tajfel & Turner, 1979），自己分類理論（J. C. Turner, 1985），<u>発達的グループ間理論（Bigler & Liben, 2006）</u>，インターセクショナリティ（Cole, 2009）
動機付け理論
期待値理論（e.g., Eccles & Wigfield, 2002），帰属理論アプローチ（Dweck, 2002）
人と環境の相互作用モデル
Bronfenbrenner & Morris, 2006

5　心理学分野の性の発達理論における ジェンダーアイデンティティの概念化

では，心理学の性の発達理論・社会認知的アプローチにおいてジェンダーアイデンティティはどのように概念化されてきたのか。上述したハンドブックを含むジェンダー発達の総説で

は，大半の先行研究が，認知発達理論（Kohlberg, 1966）とジェンダースキーマ理論（Martin & Halverson, 1981）に倣い，生物学的性別の自己認識をジェンダーアイデンティティとして捉えてきたと指摘している（e.g. Bussey, 2011）。

Kohlberg（1966）は，解剖学を重視した精神分析（Freud, 1925/1969）を受け継ぎ（Tate, 2016），認知発達理論を提示した。Kohlberg（1966）によれば，子どもの自分の性別に関する知識は，2〜3 歳頃に基本的なジェンダーアイデンティティを獲得する段階（「あなたは男の子ですか？　女の子ですか？」という質問に正しく答えられる段階）から始まり，3〜4 歳頃に性の安定性を獲得する段階（基本的なジェンダーアイデンティティが時間の経過とともに変化しないことを理解する段階）へと進み，5〜7 歳頃には性の恒常性を獲得する段階（表面的な性質の変化があっても，自分の性別が一定であることを知ること）という 3 段階を経て発達するとしている。ジェンダーアイデンティティ（ジェンダーカテゴリーに属するという理解）を獲得することで，認知的一貫性と自尊心の強化を求める内在的な欲求から，同性に属するステレオタイプ的な属性を取り入れ，異性のステレオタイプ属性を忌避するよう動機付けられるとした。

ジェンダースキーマ理論（Martin & Halverson, 1981）では，子どもは自分がどの性別グループに属しているかを理解し（ジェンダーアイデンティティ），物や行動，特性を男性・女性に結びつけるカテゴリー(ジェンダーステレオタイプ)を発達させ，環境で新しい情報に遭遇すると，認知的一貫性を動機として，その情報が自分の性別と関係があるかどうかを評価し，関係がある場合（ジェンダーステレオタイプと一致する場合）には近づき，性分化した知識やスキルを身につけるが，関係がない場合（ジェンダーステレオタイプと一致しない場合）には，それを避け，異性と自分を区別することになるというプロセスを理論化している。このようにジェンダースキーマ理論では，性別の認知が情報を整理し，解釈し，行動を導く基準を提供することを仮定するが，前提には，子どもが情報をカテゴリー化，分類する傾向・能力を持つと考えている。つまり，子どもは 1. 自分の性別を認識し，2. 他人の性別を認識し，さらに 3. 対象物や行動を男性と女性のカテゴリーに体系的に分類することができるというように，様々な能力を発達させなければならない。ここで，1. の自分の性別の認識の発達については，認知的発達理論の枠組み（Kohlberg, 1966）が援用されている（総説として Blakemore et al., 2006）。

このような認知発達理論（Kohlberg, 1966）とジェンダースキーマ理論（Martin & Halverson, 1981）によるジェンダーアイデンティティの概念化の前提には，ジェンダーアイデンティティと生物学的性別を等置する構造があり，生物学的性別の自己認識をジェンダーアイデンティティとして捉えてきた（Diamond et al., 2011）。この定義に基づき，ジェンダーアイデンティティは必然的に発達早期に出現し，ある時点（多くの場合 5〜7 歳未満）において完全に獲得されて，発達は「完了する」とも考えられてきた（Deaux & Stewart, 2004）。

6　従来のジェンダーアイデンティティ概念化の妥当性の再考

ジェンダーアイデンティティを生物学的性別の自己認識と捉える枠組みは，これまで多くの心理学研究でジェンダーアイデンティティを定

義する唯一の基準となってきた（Leaper, 2015）。しかし，生物学的決定論，生物学的性別二元論に基づくジェンダーアイデンティティの概念化の妥当性は再考されており（e.g. Buttler, 1990），先行研究の限界が認識されている。ここでは先行研究の限界について，3 点取り上げたい。

6.1　単純化されたジェンダーアイデンティティ

第一に，ジェンダーアイデンティティを単に生物学的性別の自己認識と捉えることで，ジェンダーアイデンティティは単純化され，その複雑性や流動性は捉えられてこなかった（Deaux & Stewart, 2004）。ここで，Egan & Perry（2001）は，ジェンダーアイデンティティを捉える多次元的な枠組みを提案している。ジェンダーアイデンティティを「ジェンダー集団との適合性に対する子どもの評価と，ジェンダー集団に適合しようとする動機を包含する一連の認知」と定義し，主に 8 つの次元を特定している（詳細は Perry et al., 2019）。さらに，最近では，追加的な次元が提案され拡張している（Martin et al., 2017）。このような流れを受け，近年ではジェンダーアイデンティティを一枚岩に捉えるのではなく，多面性を考慮し，どの次元を対象とするか明らかにした上で研究を実施することが求められるようになってきている（e.g. Egan & Perry, 2001）。

一方，多次元的な見方が有効なのは確かだが，十分ではないという主張もある（Deaux & Stewart, 2004）。ジェンダーアイデンティティをジェンダー化されたアイデンティティの集合として捉えることや，「交差性（intersectionality）」という概念も提案されている（総説として Holmes, 2019）。交差性とは，個人が 2 つ以上の社会的地位を持つことによるユニークな状態であり，全ての人がジェンダーアイデンティティを持っているとしても，そのアイデンティティは他の何らかのアイデンティティと交差するため，大きく異なる可能性がある。

6.2　発達早期を対象とした研究への偏り

第二に，ジェンダーアイデンティティが生物学的性別の自己認識と捉えられることで，ジェンダーアイデンティティは早期に発現し，幼少期に終着点に到達するような発達プロセスが想定されてきた（Kohlberg, 1966）。そのため，ジェンダーアイデンティティの発達の検討は，幼児期・児童期を対象とするものに偏っており，青年期・中高年期は視野に入ってこなかった（Cleman et al., 2011）。この点は多くの論者に反省されており，個人が生涯を通して，主体的に，個人的・社会的影響を受けながらジェンダーアイデンティティを発達させていくプロセスを捉える必要があることが指摘されている（e.g. 大野，2016）。

6.3　多様なジェンダーアイデンティティ経験の見落とし

第三に，ジェンダーアイデンティティと生物学的特徴に基づく性別割り当てが一致しない者は「非典型」とされ，ジェンダーアイデンティティの多様性が見落とされてきた点も反省されている（De Vries et al., 2014）。

現代では，ジェンダー・アイデンティティが，出生時に生物学的特徴に基づいて割り当てられた性別に典型的とされるものと異なることは，文化的に多様な人類に共通な現象であり，それを本質的な病理とみなし，否定的な見方をするべきではないと考えられている（World

Professional Association for Transgender Health, 2012)。しかし，最近まで，非典型的なジェンダーアイデンティティを発達させることは病理化されてきた(この経緯については,例えば佐々木（2017))。心理学者も，特に思春期の若者に対する場合，多様なジェンダーアイデンティティの形態に対し，非典型的なジェンダーアイデンティティは適応的と言えるのか？と，曖昧な態度をとってきた。その結果,「典型的」なジェンダーアイデンティティの発達に関する広範な研究とは対照的に，非臨床集団の非典型的なジェンダーアイデンティティの発達過程やジェンダーアイデンティティの構造と特性に焦点を当てた研究はほとんどない(Diamond, et al., 2011)。

Ruble, et al.（2006）は，従来のジェンダーアイデンティティに関する研究は，1. 子どもが自らを男性か女性として自覚する典型的発達プロセスを探究するラインと，2. 主に臨床集団におけるジェンダーアイデンティティのヴァリエーションを探究するラインの 2 つがあると整理している。ジェンダーアイデンティティのヴァリエーションを探究するラインでは，性分化疾患（Differences of Sex Development, 以下 DSD）を抱える人々と，性別違和（Gender Dysphoria, 以下 GD）を抱える人々が研究の対象とされてきた。

DSD とは，染色体，性腺，解剖学的な性のいずれかの性分化発達が先天的に非典型的（＝インターセックス）な状態であり生物学的性別の多様性を示していることから，性別二元論に疑義を呈する役割を負ってきた。また，ジェンダーアイデンティティとの関連で言えば，染色体の性と生殖器の形態との間に不一致がある性分化疾患を持つ DSD 者のジェンダーアイデンティティの転帰において，出生時の性別割り当ての影響の強さを示唆する報告もあり（e.g. De Vries et al., 2007），生物学的要因のみがジェンダーアイデンティティを決定するのではないことを示唆してきた。このように，DSD 者のジェンダーアイデンティティ発達研究は，ジェンダー･アイデンティティの概念を生殖器の定義，すなわち生物学的性別から遠ざける役割を果たしてきた（De Vries et al., 2014)。

GD とは，ジェンダー・アイデンティティと，出生時に割り当てられた性別（および，それに付随する性役割，一次性徴や二次性徴）の食い違いによって引き起こされた不快感や苦悩を指す（World Professional Association for Transgender Health, 2012)。

GD を持つ人の総称がトランスジェンダーであるが，トランスジェンダーはアンブレラタームであり，「割り当てられた性別に嫌悪感がある,あまりない」「違う性別になりたい,既になった」「手術を必要とする，しない」など，自己の捉え方や社会との折り合い方は様々なサブグループを内包する（石田，2019)。トランスセクシュアルはトランスジェンダーのサブグループの一つで，身体的・社会的移行を望む人々の呼称である。

心理学分野では従来，トランスジェンダーの中でもトランスセクシュアルの人々を対象とした研究を蓄積してきた。

トランスセクシュアルのジェンダーアイデンティティ研究は 2 つの貢献をもたらした。第一に，人々が自分のジェンダーアイデンティティを定義し，ラベリングする方法は多様であり，必ずしも生物学的性別とジェンダーアイデンティティは同一ではないことを示した。

第二に，ジェンダーアイデンティティを永久

的なものとして経験するか，または身体的・社会的に性別移行する場合等，ジェンダーアイデンティティを時間の経過とともに変化するものとして経験するかには個別性があることを示した（Bocketing, 2014）。

このように，重要な役割を果たしてきたトランスセクシュアルのジェンダーアイデンティティ研究だが，性別二元論という前提は持ち続けていた（Diamond et al., 2011）。つまり，生物学的性別に対応してジェンダーアイデンティティが発達するとは限らないが，対応しない場合は，もう一方の生物学的性別に対応してジェンダーアイデンティティが発達すると想定されてきた。その結果，性別二元論を前提としないジェンダーアイデンティティを持つ人（e.g. gender queer, third gender, gender non-binary）を見落としてきたことが近年反省されている（e.g. 石井，2018）。

McGuire & Morrow（2020）は，1990 年頃から始まった非典型的ジェンダーアイデンティティ研究の重要な発展として，トランスセクシュアル経験はトランスジェンダー経験の唯一の形ではないことへの認識を挙げ，トランスジェンダーグループの多様性を加味した上でジェンダーアイデンティティの発達をどうモデル化するかが課題であるとしている。従って今後は，トランスジェンダーの多様なサブグループ毎に，ジェンダーアイデンティティの発達に関連する要因や，発達機序を探求する必要があるだろう。

上述してきたように，ジェンダーアイデンティティは本来多様なものであることが理解される中で，ジェンダーアイデンティティの発達機序の全範囲を説明する理論的枠組みを得るためには，これまで分断されてきた典型的発達と非典型的発達を統合して検討する必要があると理解されるようになってきている（De Vries et al., 2014）。このような流れを受けて，近年では，ジェンダーアイデンティティの多様な形態を対象とした研究が自然科学分野・社会科学分野ともに増加しており，今後さらに発展していくことが想定される（図 2）。

7　まとめと今後の課題

本稿では，特に心理学分野の性の発達研究を概観した上で，ジェンダーアイデンティティが

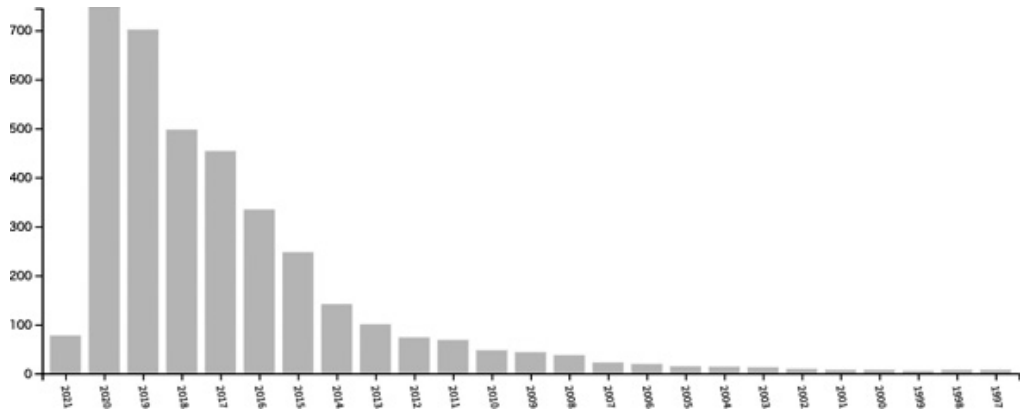

図 2　1997～2021 年で Transgender と Gender Identity がキーワードの研究数（総数＝3591），Web of Science（2021/03/11 検索）。

どのように概念化されてきたか整理した。その結果，生物学的決定論や性別二元論を前提として，ジェンダーアイデンティティを生物学的性別の自己認識として捉える枠組みが多くの先行研究で採用されてきたことが示唆された。

近年では，このような枠組みに基づく研究視点や方法が，多様なジェンダーアイデンティティのあり方や，発達機序の全容を理解する上で障壁であると反省され，新たな研究展開も見られる。特にトランスジェンダーを対象とした研究は，ジェンダーアイデンティティ概念の再構成に多大な影響を及ぼしている。一方で，性別二元論からの脱却は容易でないことも指摘されている（Diamond et al., 2011）。

このような動向を鑑み，今後ジェンダーアイデンティティ研究を行う上ではどのようなことに留意する必要があるだろうか。

鈴木・柏木（2006）は，ジェンダーに関する心理学的研究の課題の一つに，明確な操作的定義の作成を挙げている。しかし，ジェンダーアイデンティティは時代, 論者, アプローチによって定義が異なることに加え（総説は Holmes, 2019），これまで見落とされてきたジェンダーアイデンティティの多様性を考慮した上で，概念や発達の様相を捉えなおそうとする動きもある。従って，現時点では指針となる統一的定義は生成過程にあるとも言える。このような状況において研究者は最新の研究動向を捉えつつ，自らのアプローチを定め明示するよう努めることが必要だと思われる。その際には，現在の性の発達に関する心理学的研究で理論統合が目指されているように，自分と似たようなアプローチとの関係性を見定め統合する視点を持つことも重要だろう。Leaper（2015）は，研究者が他の理論とどれだけ類似していようとも，自分たちの特定の理論に固執する傾向があると指摘している。性の発達に関する研究は膨大で情報過多になりやすいことは多くの論者に指摘されており，研究を整理していく方向性を意識していく必要がある。

また，今後ますます発展することが想定される分野に，ジェンダーアイデンティティの多様な経験を対象とする領域があり，ジェンダーアイデンティティ発達機序の全容を理解する上で重要な役割を果たすことが期待される（De Vries et al., 2014）。一方で，多様性を考慮した研究が蓄積された時に先行知見とどのように統合するか，さらには，生まれも育ちも考慮する為に社会科学分野・自然科学分野の広範な知見をどのように統合するかという方法論については，今後検討が必要であると思われる。

8　本研究の限界

本研究では性の発達研究の文献レビューを行なったが，多くの論者が指摘しているように関連文献は膨大にあり全てをレビュすることはできなかった（e.g. Leaper, 2015）。また，主要な先行理論が欧米で発展してきたこともあり，欧米圏の文献を中心にレビューを行なったが，性の発達には社会的文化的要因が影響することを考えると，欧米で生成されてきた研究の枠組みを日本でそのまま採用できるかについては，新たに検討する必要がある。

引用文献

青野篤子・赤澤淳子・松並知子（編）．（2008）．ジェンダーの心理学ハンドブック，京都．：ナカニシヤ出版．

石井由香里（2018）．トランスジェンダーと現代社会：多様化する性とあいまいな自己像

を持つ人たちの生活世界, 東京. :明石書店.
石田仁（2019）．はじめて学ぶ LGBT：基礎からトレンドまで，東京．：ナツメ社.
遠藤利彦（2012）．「ヒト」と「人」: 生物学的発達論と社会文化的発達論の間．著：日本発達心理学会・氏家・遠藤（編），発達科学ハンドブック 5 社会・文化に生きる人間，新曜社，25-46.
大野祥子（2016）．「家族する」男性たち：大人の発達とジェンダー規範からの脱却，東京．:東京大学出版会.
佐々木掌子（2017）．トランスジェンダーの心理学：多様な性同一性の発達メカニズムと形成，京都．：晃洋書房.
鈴木淳子・柏木恵子（2006）．心理学の世界専門編 5 ジェンダーの心理学 心と行動への新しい視座，東京．：培風館.
中村美亜（2006）．新しいジェンダー・アイデンティティ理論の構築に向けて：生物・医学とジェンダー学の課題，ジェンダー＆セクシュアリティ(2)，3-23.
Blakemore, Judith. E. Owen., Berenbaum, Sheri. A., & Liben, Lynn. S. (2013). *Gender Development*. New York.: Psychology Press.
Bocketing, O. Walter. (2014). Transgender identity development, In Tolman, L. Deborah & Diamond, M. Lisa. (Eds.), *APA handbook of sexuality and psychology, Vol.1, Person-based approaches*, American Psychological Association, 739-758.
Bussey, Kay. (2011). Gender Identity Development, In Seth J. Schwartz., Koen, Luyckx., Vivian, L. Vignoles. (Eds.), *Handbook of Identity Theory and Research*, New York, NY: Springer, 603-628.
Buttler, Judith. (1990). Gender trouble: Feminism and the subversion of identity, New York.: Routeledge, Chapman & Hall, Inc.
Clemans, Katherine H., DeRose Laura M., Graber, Julia A., & Brooks-Gunn Jeanne. (2011). Gender in Adolescence: Applying a Person-in-Context Approach to Gender Identity and Roles, In Chrisler Joan C. & McCreary Donald R. (Eds.), *Handbook of gender research in Psychology Vol1*, *Gender Research in General and Experimental Psychology*, New York, NY: Springer-Verlag New York, 527-557.
De Vries, A. L. C., Kreukels, B. P. C., Steensma, T. D., & McGuire, J.K. (2014). Gender Identity Development: A Biopsychosocial Perspective, In De Vries, A. L. C., Kreukels, B. P. C., Steensma, T. D., & McGuire, J. K. (Eds.), *Gender Dysphoria and Disorders of Sex Development Progress in Care and Knowledge*, Springer, 53-80.
De Vries, Annelou L. C., Doreleijers, Theo A H., & Cohen-Kettenis, Peggy T. (2007). Disorders of sex development and gender identity outcome in adolescence and adulthood: Understanding gender identity development and its clinical implications, *Pediatric Endocrinology Reviews*, 4, 343-351.
Deaux & Kite, M. K. (1993). Gender stereotypes. In F. L. Denmark & M. A. Paludi (Eds.), *Psychology of women: A handbook of issues and theories*, Westport, CT: Greenwood Press/Greenwood Publishing Group, 107-139.
Deaux, Kay. & Stewart, Abigail J. (2004). ジェンダー化されたアイデンティティを考える，R. K. アンガー編著，森永康子・青野篤子・

福富護（監訳），日本心理学会ジェンダー研究会（訳），女性とジェンダーの心理学ハンドブック，京都：北大路書房，100-118.

Diamond, Lisa M., Pardo, Seth T., & Butterworth., Molly R. (2011). Transgender Experience and Identity, In Seth J. Schwartz., Koen, Luyckx., Vivian, L. Vignoles. (Eds.), *Handbook of Identity Theory and Research*, New York, NY: Springer, 629-648.

Egan, Susan K., & Perry, David. (451-463.). Gender Identity: A Multidimensional Analysis With Implications for Psychosocial Adjustment, Developmental Psychology, 37(4).

Freud, Sigmund. (1925/1969). 解剖学的な性の差別の心的帰結の二，三について．著 : Freud 懸田克躬・吉村博次（訳），S., フロイト著作集第 5 巻，人文書院，161-170.

Halim, May Ling & Ruble, Diane. (2011). Gender Identity and Stereotyping in Early and Middle Childhood, In Chrisler, Joan C., & McCreary, Donald R., *Handbook of gender research in Psychology Vol1, Gender Research in General and Experimental Psychology*, New York, NY: Springer-Velag, 495-525.

Hines, Melissa. (2015). Gendered Development, In Richard M. Lerner. (Editor-in-Chief), E. Lamb, Michael. (Volume Editor), *Handbook of Child Psychology and Developmental Science, Volume 3, Socioemotional Processes*. (7th ed.), Wiley, 842-887.

Holmes, Mary. (2019). In Elliot, Anthony. (Ed.), *Routledge Handbook of Identity Studies*. (2nd ed.), London.: Routeledge, 186-202.

Huston, Aletha C. (1985). The Development of Sex Typing: Themes from Recent Research, *DEVELOPMENTAL REVIEWS*, 5, 1-17.

Huston, Aletha C. (1983). Sex-typing, In Hetherington M. E. (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 4, Socialization, personality, and social development*, New York.: Wiley, 387-467.

Kohlberg, Lawrence. (1966). A cognitive-developmental analysis of children's sex role concepts and attitudes, In Maccoby E. E (Ed.), *The development of sex differences*, Stanford, CA.: Stanford University Press, 82-173.

Leaper, Campbell. (2015). Gender and Social-Cognitive Development, In Richard M. Lerner. (Editor-in-Chief), E. Lamb, Michael. (Volume Editor), *Handbook of Child Psychology and Developmental Science, Volume 2, Cognitive Processes* (7th ed.), John Wiley & Sons, Inc, 806-853.

Maccoby, Eleanore. (Ed). (1966). The development of sex differences, Stanford, CA.: Stanford University Press.

Maccoby, Eleanor E., & Jacklin, Carol, Nagy. (1974). The psychology of sex differences. zstanford University Press.

Martin, C. N., Naomi Andrews, N. C. Z., Ruble, D. N., England, D. E., & Zosuls, K. (2017). A Dual Identity Approach for Conceptualizing and Measuring Children's Gender Identity, *Child Development*, 88(1), 167-182.

Martin, Carol Lynn., & Halverson Jr. Charles F. (1983). Gender constancy: A methodological and theoretical analysis, *Sex Roles*, 9, 775-790.

McGuire, J. K., & Morrow, Q. J. (2020). Pathways of Gender Development, In Forcier Turban, J. L., & Van Schalkwyk, G. (Eds.), *Pediatric*

gender Identity: Gender-affirming Care for Transgender & Gender Diverse Youth, Springer, 33-46.

Perry, D. G., Pauletti, R. E., & Cooper, P. J. (2019). Gender identity in childhood: A review of the literature, *International Journal of Behavioral Development* 2019, Vol. 43(4).

Ruble, D. N., Martin, C., & Berenbaum, S. A. (2006). Gender Development, In Damon Learner, R. M. & Eliot-Pearson (eds.), Eisenberg, N. (Volume eds.), *Handbook of Child Psychology, Volume III, Social, Emotional, and Personality Development*, Wiley & Sons, 858-932.

Ruble, D. N., & Martin, C. (1998). Gender Development, In Eisenberg, N. (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3, Personality and social development* (5th ed.), New York: Wiley, 933-1016.

Tate, C. (2016). Gender identity as a personality process, In L. MillerBeverly (Ed.), *Gender identity: Disorders, developmental perspectives and social implications*, Hauppauge, NY.: Nova Science Publishers, 1-22.

World Professional Association for Transgender Health. (2012). Standard of care for the health of transsexual, transgender, and gender-nonconforming people.